

【書評】

『Asian Nationalism』

マイケル・リーファー編 ルートレッジ社 2000年5月

評者 神保 謙
アジア太平洋研究センター研究員

1950年1月号の『中央公論』は「アジアのナショナリズム」を特集し、その中で山政道はアジアを全般的に動かしている共通のものは近代国家への胎動としてのナショナリズムである、と論じた。この特集から既に半世紀が経過した。その間、アジア諸国は、独立の達成、国家建設、内戦や混乱の経験、80年代以降の経済発展、近年の経済危機、グローバル化への対応とその様相を様変わりさせた。現代のアジアのナショナリズムはどのように捉えなおすことができるのか、またアジアに共通する経験はあるのだろうか。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)アジア研究センターは、この課題を共通テーマとして、編者のマイケル・リーファーを中心とする10人の教授・講師陣によって本書をまとめあげた。

冒頭でナショナリズムの諸理論(特に近代化理論とエスノ・シンボリズム)を紹介しつつ、中国・台湾・日本・インド・パキスタン・インドネシア・フィリピンにおけるケーススタディを行っている。中華ナショナリズムと共産党統治のナショナリズム、台湾における民主化過程、日本の明治維新から戦時体制、戦後のナショナリズムの変化等がそれぞれコンパクトに論じられており、アジア諸国のナショナリズムを比較検討するには、きわめてハンディな書といえる。結論の章では、アジアにおけるナショナリズムの分類は「欧州/アフリカ/アジアという構図や、伝統主義/市民主義という構図ではなく、脱植民地ナショナリズムとそれ以外」であると結論付けている。

多くのアジア諸国における国家建設過程のナショナリズムが、宗主国に対する抵抗によって形成され、また近年のナショナリズムの形をポスト・モダン化するグローバルな政治・文化と倫理生活の保守との緊張関係ととらえるならば、第二次大戦後のアジアにおけるナショナリズムは受動的な、いわば擬似アイデンティティ(Pseudo Identity)なのかもしれない。それを冷徹に捉えているところは面白い。しかし、ナショナリズムが受身としてではなく、アジア諸国が独自の価値観の放出という形で自信をもって示している部分を積極的に捉え

なおす必要があるのではないかと感想をいだきたくもなる。また、せっかく冒頭の章で理論を整理しているにも関わらず、全体を貫くクロススタディが行われているとは言いがたい。惜しまれるところである。

フィリピンを論じた章では、「ナショナリズムと民主主義が両立するのは、国家が『民主的に想像された』場合である」と述べている。折しも本文を執筆中に、フィリピンではエストラダ大統領が「ピープルズ・パワー」に屈する形で辞任し、新たにアロヨ政権が成立した。アジアは脱植民地ナショナリズムを「脱して」新たなナショナリズムのダイナミズムの中にある。日本の戦後ナショナリズムの変容、中国の複層のナショナリズム、そしてフィリピン、タイ、インドネシア、台湾に興隆している民主化をどのように理論的に整理し、その特徴をつなげるのか。こうした現代アジアにとりわけ焦点を置いたナショナリズム研究の続編が待望される。